教うるは 学ぶの 半ばなり

R５南信教育事務所だより

教学半也

令和５年10月19日
No.6

初任者、初任研Ｃｏ
５年経験者、メンターチーム
・　初任者に関わる読者対象

教師力向上研修Ⅱ・Ⅳ

自己課題の解決に向けた見通しをもつ

「教師力向上研修Ⅱ・Ⅳ」が諏訪、上伊那、下伊那の各地区で開催されました。今回の研修は、初任者と５年経験者が、これまでの研修で設定してきた自己課題について、授業実践をもとに意見交換を行いました。

自己課題の解決に向けて、見通しをより明確にしていく場面では、持ち寄った実践記録を示し、それぞれの経験や事例を根拠に語り合いました。その中で、広い視野で授業を計画することや、こうありたいという教師像が見えてきたようです。

５年経験者の司会で　笑顔に　和やかに

ICT機器は手立てのひとつ

子どもがすすんでICT機器を活用している先輩の実践から、自分本位で機器を使用していたことに気付きました。ICT機器はあくまでも手立てのひとつでしかなく、めあて→見通し→ねらいの達成といった、授業計画をしっかりと立てることを大切にしたいと改めて感じました。

（初任者　振り返りより）

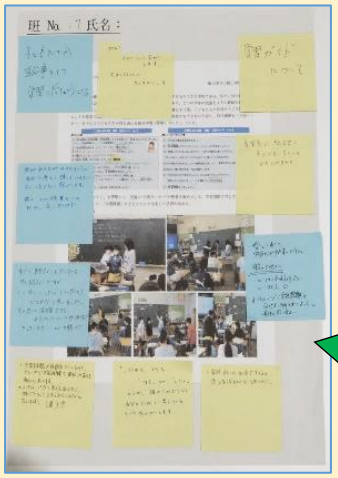
新たな視点でアドバイスをもらって

特別支援学校の先生から、１時間の授業の流れを視覚的に示すことや、情報を端的に伝える必要性などのアドバイスをもらいました。そのような支援を必要としている子どもの顔が浮かんだので、自己課題とも関連付けながら、授業に生かしていきたいと思います。

（５年経験者　振り返りより）

実践に耳を傾け　語り合う

校種や教科、担当学年の異なるグループで意見交換を行ったことで、経験年数に関係なく、自己課題の解決に向けたヒントを得たり、授業づくりの基本に立ち返ったりすることができたようです。



「すぐにできてしまう子には、終わった後に何をするのかを必ず示している。」という先輩の実践が参考になりました。子どもの学びが深まるような授業づくりを大切にしていきたいです。

（初任者　振り返りより）

初任者の先生方と話すことで、自分が大切にしてきたことが整理された気がしました。改めて、子どもとの関係づくりを土台に、皆がいきいきと活躍できる授業を作っていきたいです。

（５年経験者　振り返りより）

持参した実践記録には、同じグループの仲間からの鋭い指摘やアドバイスが書かれた付箋がギッシリと貼られました。自己課題という共通の話題で、学び合い、語り合う場は、校内のOJT研修に通じるものがあります。
次ページ『特集』もご覧ください。

【特集】
初任者を支える
先生方対象

互いに成長するメンターチーム

～ 飯田養護学校の15分OJT研修 ～

初任者研修メンターチームは、初任者に関わって授業づくりや学級づくりを互いに学び合う、経験年数や専門性の異なる先生同士で構成されたチームです。飯田養護学校では、学年会の冒頭15分間を活用してメンターチームによる校内OJT研修を行っています。限られた時間で、どのように初任者の課題を共有し、課題解決に向けた意見交換をしているのか紹介します。

1．初任者の疑問や悩みからテーマを設定

メンターリーダーの清水先生は、土屋先生の自己課題②（右記）に関わって「チームティーチングにおける教師の役割について知りたい」という願いを受け、この日のOJT研修のテーマを、『生活単元学習のCT・ST（※）それぞれの立場で大事にしていること』に設定しました。テーマが伝えられると、チームの先生方は手慣れた様子で付箋に考えを記入します。発表順をじゃんけんで決め、和やかな雰囲気で研修が始まりました。

※　CT（チーフティーチャー）・ST（サポートティーチャー）

【初任者】

土屋 詠介 先生
（小学部２年担任）

【自己課題】
①児童の実態やねらいを正しく把握して授業を構成すること
②支援体制や職員の動きなどを理解して、事前準備を詳細に行うこと

2．チームの先生方の実践から学び合う

私は、CTの時は全体の動きを見ながら、特に時間の配分を意識します。指示や話すときのスピードもゆっくりハッキリを心掛けます。先生方はどうですか？

清水 みつ子 先生（メンターリーダー）

CTの時は、子どもが私を視覚的に追いやすいように、動きすぎないようにしています。その分、STの先生に動いてもらうように計画します。

横澤 佳奈 先生（小学部２年担任）

私もCTの時は、計画段階で連携をイメージして役割を分担して授業づくりをします。STのときは、子どもの目線で盛り上げ役もしますね。

北沢 愛美 先生（小学部２年担任）

STの時は黒子に徹しますが、CTの時は必要に応じて模擬授業をします。ノートにシナリオを書いて、言葉にしてみると気がつくことがあります。

戸田 大介 先生（小学部２年担任）

チーム職員の学びにも

「土屋先生の、わからないことをそのままにせず、まず子どもの目線で考える姿勢は勉強になります。」

「私も特別支援学校の経験が浅いのですが、土屋先生の、ICTの活用法やモノづくりの経験から学ぶことが多いです。」

「OJT研修は職員間の絆を強くする機会になっています。先生同士が同じ方向を向くと、支援が自然とそろうのを感じます。」

3．自己課題の達成に向けた具体的な取組へ

私はこれまで、子どもの願いに応じて授業を準備することや、口を出しすぎないようにサポートすることは意識して行っていました。先生方の意見を参考に、今後、CTとして授業を計画する時は、連携のための分担やシナリオ作成を行ってみたいです。STになる時は、活動のモデルになったり、子どもの活動意欲を高めたりする言葉がけを意識していきたいです。自己課題に対して、今知りたいことを具体的に扱っていただき勉強になりました。

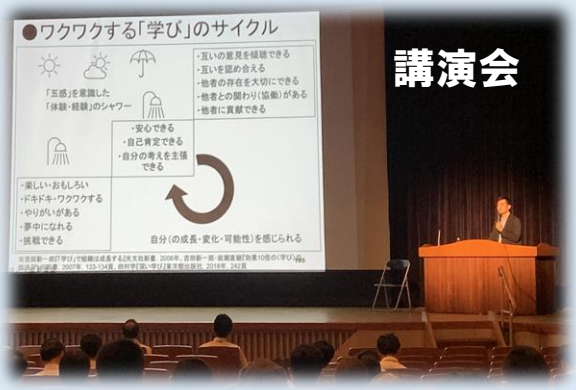
飯田養護学校では、今回取材した小学部だけでなく、中学部や高等部でも、改めてチームで集まる場を設定するのではなく、短時間で定期的に行うことを大切にしています。初任者の今したいこと、困っていることについて、即時にチームで共有し、解決の糸口を見い出せる事は、初任者の安心感にもつながります。

土屋先生はこの頼もしいチームに支えられ、どのように自己課題を更新していくのでしょうか。今後も取材を続けていきたいと思います。

令和５年度

地域連携・協働フォーラム

8月24日(木)に地域連携・協働フォーラム（学社連携・協働意見交換会）を開催しましたところ、173名の皆様にご参加いただきました。本年度は４年ぶりの参集開催となりました。講演会・分科会ともに、「地域ぐるみで子どもを育てる」ために一人一人ができることについて考えるきっかけを与えていただき、充実した研修の場となりました。



信州大学教職支援センター准教授の荒井英治郎先生に「VUCA時代における子どもの育ちと学びと大人の役割」というテーマでご講演をいただきました。予測不可能な時代を生きていく子どもたちが、今どのような状況に置かれ、これからどのような力を育んでいく必要があるのか。そして、それを支える私たち大人は、これまでとはちがう視点でものごとを見つめ、私たち自身が変革していかなければならない。データや資料をもとに、刺激的なお話をお聞きし、今の社会・未来の社会について、まさに自分事として考えるきっかけを与えていただきました。

【参加者の声（講演会）】

〇少子化・貧困・感染症と、様々な課題を抱える中、私たちが子どもを育む際、学校で何とかしなければ…と考えるのではなく、地域・家庭と連携し、互いの強みを生かしながら子どもたちにかかわっていくことの必要性を改めて実感しました。

６つの分科会では、様々な立場で社会教育・子ども支援等にかかわっている皆さんから話題提供をいただき、とても有意義な情報交換が行われました。

【参加者の声（分科会）】

分科会①【シニアのとりくみ♡お見せします】
どの方（団体）も「やさしさ」「放っておけない想い」をもとに、自分たちができることを具現化して、生き生きと活動されていて素敵だと思いました。

分科会②【中川村のろしあげ実行委員会14年間の歩み】
地域の方が協力して楽しみながら活動を続けてこられたことを感じました。我々の地域でも参考になればと思いました。

分科会③【子どもの主体性を引き出す中高生の居場所づくり】
地域と学校がどのようにつながればいいのか、その具体を知ることができる機会となりました。特に、子どものニーズと地域に今ある施設・人をつなげるために、一歩踏み出すためにできることを考えることができ、大きな学びがありました。

分科会④【電気部の地域連携活動　高校生の地域貢献】
岡谷工業高校の生徒さんの話を聞き、問題は子どもではなく、大人の固定観念なのだと感じました。同時に高校生の話に頼もしさを感じました。

分科会⑤【「つなぐ会」の取組～生きづらさを感じている中高生の支援】
飯島町として、生まれる前から高校卒業までを切れ目なくフォローする体制が素晴らしい。保護者はもちろん、保育士・教職員にとっても頼れる存在になっていると感じました。

分科会⑥【高遠町公民館「進徳館～夏の学校～」の取組】
高遠の歴史に基づいた進徳館での取り組みで、学年を越えた関係づくりや高校生とのコラボ活動など、地域教育のあり方を学ぶことができました。

フォーラムにご参加いただいた皆様、ありがとうございました